

やまなし

2016.10.17
vol.14

no. **1**

contents

- 2 | 大学図書館の存在意義
- 4 | 図書館利用者の声
- 5 | 学生にすすめる本
- 6 | 図書館統計
- 7 | 図書館トピックス
 - 大村智特別荣誉博士胸像の設置 [本館]
 - 講演会「今、『羅生門』を読むことの意義」を開催 [本館]
 - ミニコンサート「合唱と室内楽」を開催 [本館]
 - 講演会「平穏死」を開催 [医学分館]
- 8 | 今後のイベント紹介 ほか

The Yamanashi
Bulletin of the University of Yamanashi Library

大学図書館の存在意義



キタムラ カズオ
山梨大学附属図書館 医学分館長 喜多村 和郎

本年4月より医学分館長に就任いたしました。これから3年間よろしくお願いします。さて、私と大学図書館の関わりについて振り返ってみますと、学部生であった25年前は、教科書や専門書を閲覧してレポート作成や試験勉強をする場所でありました。大学院に進んで研究を始めてからは、実験の合間に新刊学術誌のコーナーに行き冊子を取り最新の論文を片っ端からチェックしたり、過去の文献を探しに行ったりと、一日のほとんどの時間を研究室か図書館か生協のどれかで過ごすと言っても過言ではないほど、大学図書館は非常に身近な存在でした。それが、大学院を修了してしばらくしたあたりから、主要な学術雑誌がオンライン化されはじめ、研究室のPCから利用できるようになると、図書館へ足を運ぶ頻度は激減しました。ほとんどの雑誌とそのアーカイブが電子化され、洋書の専門書などもアマゾンなどで簡単に購入できるようになった現在では、会議などで図書館の建物に入ることはあっても利用者として立ち寄ることはなくなってしまいました。

このように、今の私にとって大学図書館は、その所在は知っていても普段は全く意識することのない空気のような存在となってしまうという訳ですが、今回、医学分館長を拝命するにあたり、医学分館の現状とこれからのあり方について考えてみたいと思います。

1) 学びの場としての大学図書館

学生にとって、教科書や参考書を閲覧して自学自習ができるスペースを確保することは必要不可欠であり、医学分館は設立時からその役割を担ってきました。これは今後も変わることはありません。とは言え、医学分館の現状は私が学生だった頃の大学図書館とほぼ同じであり、施設の老朽化に加えて、様々な情報や媒体が電子化され、学生の生活・学習環境も大



きく変化した現在においては時代遅れであるという感が否めません。2年ほど前に改修を終えた甲府キャンパスの本館は、十分な個別学習スペースはもちろんのこと、ラーニングコモンズと呼ばれる共有学習空間や、グループ学習室、サイレントエリア、視聴覚室、端末室など現代の大学図書館が備えるべき機能が充実しており、開放的な雰囲気の中で学生が自由かつ積極的に学習できる環境が整っています。本学と同時期に設立された医科

大学の多くにおいて附属図書館の改築・増築が進められていることを鑑みても、医学分館の改修は喫緊の課題であり、多様な学習環境の提供が急務であると感じています。



2) 情報資源の提供

言うまでもないことですが、ジャーナルの電子化によって図書館に直接足を運ぶことがなくなったといっても、ジャーナルの契約主体は大学図書館であり図書館を通さなければ利用できませんので、利用の仕方が変わったに過ぎません。また、近年では、教科書や参考書などの図書資料も全てではないですが、徐々に電子化されつつあります（本学で利用できる医学分野の電子ブックについては、www.lib.yamanashi.ac.jp/igaku/e-journalbook/e-books.htmlをご参照下さい）。また、論文データベース（Web of Scienceなど）や、



様々な医療情報データベースへのアクセスも可能となっています。さらにこれらの資料の一部は、「学認（学術認証フェデレーション）」によって学外からもアクセスすることができ、今後それらの資料も拡大していくことが望まれます。将来的には貴重な保存資料などの電子化も進むことにより、情報資源の提供という点では、大学図書館はますますヴァーチャルな存在となっていくことが予測されます。

限られた予算の中で、どのような情報をどういった形で提供するのが最良であるのかは、利用者の方々のご意見が大変貴重になります。図書館の提供する情報をぜひご活用くださり、問題点や改善点を図書館までお寄せ下さい。

3) 大学の顔としての大学図書館

大学図書館のもう一つの重要な存在意義は、大学の教育研究レベルはその大学図書館を見れば分かると言われるように、学問の府である大学の「顔」としての存在です。一例を挙げますと、私が研究員として留学していた英国のユニバーシティ・カレッジ・ロンドンは、メインキャンパスにある附属図書館が大学を代表する建造物で、大学のシンボルマークにもなっています（www.ucl.ac.uk/library/sites/main）。甲府キャンパスの本館は、大学の顔と呼ぶに相応しい設備と外観を備えた施設に生まれ変わったわけですが、医学分館も、国際的な視野を持ち地域医療に貢献できる医療人や世界に通用する医学研究者の養成を目標に掲げる医学部の理念を象徴する施設としてあり続けるために、時代とともに常に発展・進化し続けていくことが必要であると考えています。

図書館を経由して開く世界

医学部 小児科学講座 診療助教

ワタナベ アツシ
渡邊 敦

このところ、MyLibrary経由で過去の貴重な論文を入手していただくことが多々ありました。近年はインターネットの普及に加えてオープンアクセスの考え方が広まり、無料で全文が手に入る文献もありますが、それでもアクセスが制限されている論文も多いのです。著作権など難しい問題があるのでしょうか。あるいは、古すぎて電子化されていないのかもしれませんが。いずれにしても、きちんと全文を読みたいと思ったとき、附属図書館に学外文献複写を依頼します。文献の到着まで、ほんのちょっと待つこと。デジタルデータではなく、紙媒体で論文が届くこと。そして「どうぞお使いください」とメモが添えられていたりすること。ネットにがんじがらめにされた世界にあって、こうしたことに新鮮なヒトの暖かみを感じてしまう今日このごろです。十分に検索しきれていなくて「ダウンロード、できましたよ」とか「図書館に雑誌がありましたよ」などと司書さんに指摘され、大変恥ずかしい思いをすることも往々にしてあります。しかし、過去の資料から新たな気づきがあった時とは、少し大げさかもしれませんが、科学の世界が広がる瞬間なのではないでしょうか。図書館というと、ともすれば建物の中に存在する本で構成されているような錯覚に陥りますが、しかし実は、他施設との連携による巨大な知の世界の入り口にもなっているんだと感じています。敬意と感謝をこめて。



学生生活に欠かせない場所

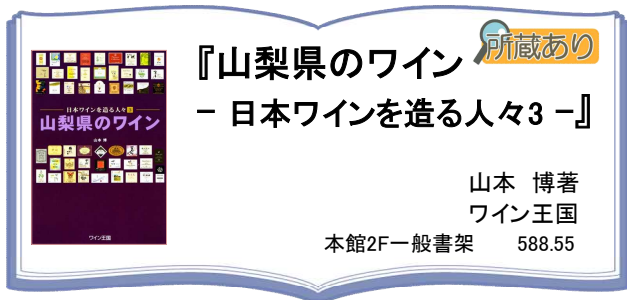
大学院医工農学総合教育部
メカトロニクス工学コース1年
コイケ ユウ
小池 祐

山梨大学における私の学生生活において、附属図書館は様々な面から支えてくれる、無くてはならない存在です。入学当初は勉強のために集う場所として、研究室に配属されてからは図書館本来の姿で支えてくれています。

恥ずかしながら学部1年次の私は極めて成績の悪い学生でした。おかげで2年次以降に再履修のしわ寄せがきてしまい、友人たちにもまして努力をしなければならなくなりました。当時の授業は専ら定期試験の点数を重視するものだったので、授業が終わるや否や友人と図書館に集い、閉館の時間ギリギリまで試験対策をしたものでした。

その甲斐もあり、何とか4年次には志望する研究室に所属でき、このころからは研究やレポート課題の資料や文献を求める場として図書館を活用するようになりました。図書検索システムをはじめ、図書館の様々な機能にも触れる機会が増え、私が思うよりはるかに学生のことを考えてくれているのだと感じました。たとえば、もはや学生には必要不可欠なスマートフォンの充電器や、電子黒板、タブレット端末の貸し出しまで行っていることをご存知でしょうか。図書館は学生にとってとても居心地の良い場所となっています。

このように学生にとって絶好の学びの場である図書館ですが、私の周りではあまり良さが認知されていないように感じます。もっと図書館のサービスについて知られるような機会があれば、学生の図書館利用はもっと有意義になると思います。

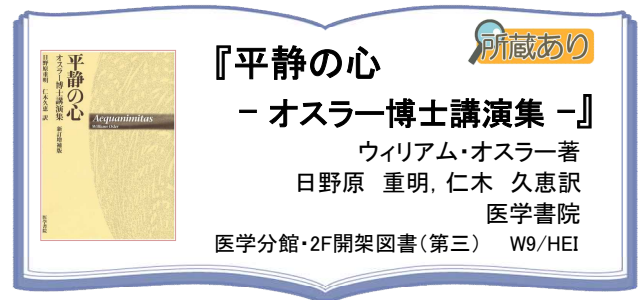


『山梨県のワイン』 所蔵あり - 日本ワインを造る人々3 -

山本 博著
ワイン王国
本館2F一般書架 588.55

ワイン科学研究センター・発酵微生物工学研究部門

ヤナギダ フジトシ
柳田 藤寿 教授



『平静の心』 所蔵あり - オスラー博士講演集 -

ウィリアム・オスラー著
日野原 重明, 仁木 久恵訳
医学書院
医学分館・2F開架図書(第三) W9/HEI

医学部 内科学講座第1教室 (光学医療診療部)

サトウ タダシ
佐藤 公 准教授

おいしい日本ワインがどんどん増えてきて、日本ワインの消費量も右肩上がりです。日本には、約240のワイナリーがあり、約40のワイナリーがここ2年で誕生しています。

この本は、第一章として、山梨県ワイン産業の現状としての生産地、ワインの品質、消費とシェア、ブドウ品種、県行政や山梨大学や国産ワインコンクールなどの内容が網羅されています。第二章では、山梨のワイナリー約80の内、約60を網羅しています。掲載は、大手ワイナリー、他資本参加ワイナリー、共同経営ワイナリー、個人・家族経営ワイナリーの順になっています。その内容も、ただワイナリーの紹介だけでなく、ワイナリーの歴史や業務内容（栽培技術や醸造技術等）、さらにスタッフの出身大学や簡単な略歴に関する内容まで掲載されているのは、興味深い。ワインの紹介も、代表的なワインだけでなく、そのワイナリーで販売されている主要ワインの多くを、使われている原料葡萄も含めて紹介しています。また、山梨のワイン業界に対する著者の考えも書かれており、問題提起もされています。ただ、ワイナリーの所在や営業時間など簡略されているので、一般の方がワイナリーを訪れるのには向かないと思う。将来、日本ワインの業界で仕事をする

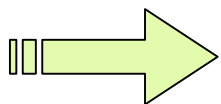
方にとって今、ブームになっている日本ワインの基本的な情報を得るのに欠かせない一冊である。



本書は、「Medicine is a science of uncertainty and an art of probability. (医学は不確実性の科学であり、確率のアートである)」という言葉でも知られるオスラー博士がジョンズ・ホプキンス大学の内科教授であった頃の講演を中心に編集された講演集「Aequanimitas (平静の心)」がもとになっている。日本人の理解を容易にするために訳者である日野原重明先生と仁木久恵先生による充実した注釈もつけられている。

代表的な講演である「平静の心」では、「内科医・外科医を問わず、医師にとって、沈着な姿勢、これに勝る資質はありえない」とし、「嵐の真ただ中での平静さ、重大な危機に直面した際に下す判断の明晰さ、何事にも動じず、感情に左右されない」ことの重要性を説いている。「生き方」の章では、「人生は習慣であり、その日一日の仕事を全うするための生活の実践である」として、「明日を思い煩わず、過去を忘れて、今日に生きよ」と述べている。また、オスラー博士は、ベッドサイド実習に代表される卒前臨床教育を取り入れた医学教育の改革者としても知られている。アメリカの医学教育システムは日本とは異なるものの、現在の日本においても課題となっているクリニカル・クラークシップの記載が、19世紀後半の彼の描いたカリキュラムにあることには驚きを禁じ得ない。彼は死後何をして欲しいかと生前に尋ねられたときに、自分の墓の碑文に「学生を病棟に引き入れた人、ここに眠る」と書くことを望んだという。

臨床医として、教育者として生きたオスラー博士のメッセージは、時代を超えた見識にあふれ、不確実性に満ちた現代を航海する人の指針や救いになると信じてやまない。

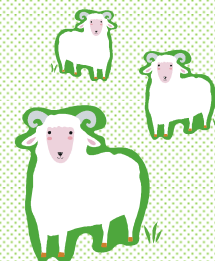


図書館統計 平成27年度 (2015)

1 図書館利用統計

(1) 開館日数・入館者数

区分	開館日数	入館者数(人)		
		学内者	学外者	合計
本館	288日	144,445	1,240	145,685
分館	287日	180,315	185	180,500



(2) 館外貸出冊数・参考調査取扱件数

区分	館外貸出冊数(冊)				参考調査 件数
	学生	教職員	学外者	合計	
本館	23,457	3,281	641	27,379	1,959
分館	13,609	2,863	191	16,663	2,500

(3) 相互利用

区分	貸借(単位:冊)		文献複写(単位:件)	
	貸出	借受	受付	依頼
本館	164	179	1,105	813
分館	55	55	1,426	2,227
合計	219	234	2,531	3,040

(4) 子ども図書室

開館日数	96日
入室者数	1,260人
貸出券発行人数	50人
蔵書冊数	4,442冊
貸出冊数	710冊

2 図書館蔵書統計

(1) 図書・雑誌蔵書数 (H28.3.31現在)

区分	図書(単位:冊)			雑誌(単位:種)		
	和図書	洋図書	合計	和雑誌	洋雑誌	合計
本館	340,473	126,773	467,246	7,340	2,435	9,775
分館	54,392	42,383	96,775	2,271	1,325	3,596
合計	394,865	169,156	564,021	9,611	3,760	13,371

(2) 図書・雑誌受入数 (H27年度)

区分	図書(単位:冊)			雑誌(単位:種)		
	和図書	洋図書	合計	和雑誌	洋雑誌	合計
本館	3,312	89	3,401	2,089	187	2,276
分館	1,220	57	1,277	501	95	596
合計	4,532	146	4,678	2,590	282	2,872

大村智特別荣誉博士胸像の設置



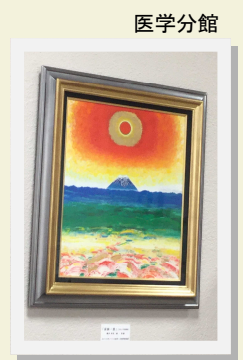
除幕式



胸像



「富嶽・暁」



医学分館

「富嶽・悠」

このたび、本館1階エントランスホールに大村智特別荣誉博士の胸像が設置され、10月5日（水）に除幕式が執り行われました。また、大村智先生が推奨する櫻井孝美氏の絵画が作家ご本人より寄贈されました。本館に「富嶽・暁」、医学分館に「富嶽・悠」が展示されています。一般の方も鑑賞できますので、あわせてご覧ください。

講演会「今、『羅生門』を読むことの意義」を開催



7月1日（金）本館1階において、横浜市立大学教授の庄司達也先生をお招きし、「今、『羅生門』を読むことの意義—西洋の『知』の受容としての“Sentimentalism”」と題した講演会を開催しました。この講演会は、附属図書館所蔵の近代文学文庫に関連したイベントとして実施されたもので、当日は、一般の方、学生、教職員など35名が聴講しました。

講演では、山梨県立文学館所蔵の芥川龍之介が東京帝大時代に記したノートを元に、「羅生門」の作中における「Sentimentalism」の独特の意味を明らかにした上で、これまでの一般的な読解（「下人が盗人になる話」）とは異なる作品の新しい解釈の可能性についてお話されました。参加者からは、「自分が知っていた読み方と異なる視点を得られてとても有意義だった」「久しぶりに文学のお話に関わった」などの感想がありました。

* 関連常設展「漱石没後100年記念 大正文学展—夏目漱石から芥川龍之介まで」本館2階第一展示室にて公開中です。

ミニコンサート「合唱と室内楽～お昼のひとときに音楽を♪～」を開催



本館では、9月29日（木）に「合唱と室内楽～お昼のひとときに音楽を♪～」と題したコンサートを開催しました。教育学部で音楽を学ぶ学生を中心に、前半は『You raise me up』、『夢みたものは…』の合唱、後半は『くるみ割り人形 ディベルティスマンセレクション』をフルートやクラリネット、打楽器などの室内楽で演奏しました。昼休み時間の公演で、幼稚園児から学生、教職員まで、幅広い方が鑑賞しました。



講演会「平穏死」を開催



10月13日（木）、医学部キャンパスにおいて、世田谷区立特別養護老人ホーム芦花ホーム常勤医の石飛幸三先生をお招きし、「平穏死」と題した講演会を開催しました。

この講演会は、附属図書館医学分館内に常設されている「生と死のコーナー」の関連行事（平成28年度附属図書館医学分館地域貢献事業）として実施されたもので、当日は医学生、教職員、地域の医療関係者、一般の方など約200名が聴講しました。

講師の石飛先生は、かつて東京都済生会中央病院の血管外科医として最先端の医療に携わり、一転、特別養護老人ホームの常勤医に転身された方です。医師としてのこれまでの経験を踏まえ、特養での看取りの考え方を説き、入所者の穏やかな最期（死）を見つめてきた視点で事例を交えながら、老いに対して医療はどこまで介入すべきなのか、「平穏死」のすすめについて話されました。会場では講師の話しに熱心にメモを取る方、うなずきながら聴き入る方が多く見られ、また最期が近づいた方のために、ホームの職員が、ご夫婦の結婚記念日のサプライズパーティーを開いた動画を紹介した時には、目頭をおさえる姿が見られました。

参加者からは、多くのメッセージが寄せられ、「人の生き方、意味ある医療について改めて考える機会となりました。」「まだ学生ですが、患者さんに本当に必要な医療とは何なのかを考えるきっかけとなりました。」などの感想がありました。

今後のイベント紹介

平成28年度山梨県・山梨大学連携事業

申込必要

「子どもの読書活動推進スキルアップ講座」のご案内

- * 第3回 10月27日（木）こどもの本コーディネーター さわだ さちこ氏による講演
- * 第4回 12月8日（木）イラストレーター 鈴木みき氏による講演
- * 第5回 1月26日（木）大阪市立大学大学院教授 石田佐恵子氏による講演



【お申し込み・お問い合わせ】

山梨県立図書館サービス課 子ども読書推進担当 〒400-0024 甲府市北口二丁目8-1

TEL 055-255-1040（代） FAX 055-255-1042

主催：山梨県立図書館・山梨大学附属図書館子ども図書室

◆イベント詳細については、ポスター・パンフレット・山梨大学附属図書館ホームページ等でお知らせいたします。皆様のご参加をお待ちしています。

学外の方への利用案内

本館及び医学分館は、山梨大学以外の大学生をはじめ一般の方々も利用できます。詳細については、<http://lib.yamanashi.ac.jp/>をご覧ください。本館 Tel:055-220-8066（情報サービスグループ）、医学分館 Tel:055-273-9357（医学情報グループ）にお問い合わせください。



● 表紙：胸像除幕式にて
場所：本館1Fエントランスホール（大学職員 撮影）

山梨大学附属図書館報
「やまなし」
第14巻第1号

2016年10月17日 発行

編集：館報編集委員会

発行：山梨大学附属図書館

〒400-8510

甲府市武田四丁目4-37

TEL 055-220-8063